慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『判決』における資本主義と結核の関係について
Sub Title	Zur Beziehung zwischen Kapitalismus und Tuberkulose in „Das Urteil" von Franz Kafka
Author	寺田, 雄介(Terada, Yusuke)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2013
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.30 (2013. 3) ,p.217- 243
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20130331-0217

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『判決』における資本主義と結核の関係について

寺田雄介

0　はじめに

フランツ・カフカの短編小説『判決』は、1912年の秋に執筆された。9月22日の深夜から23日の早朝にかけて、彼はたったの8時間で書き上げた。執筆の経緯がこのように明確となっているのは、カフカ自身が日記に以下のように記録しているからである。「この『判決』という物語を、僕は22日の夜10時から、23日の朝6時にかけて一気に書いた。座りっぱなしでこわばった両足を、書き物机の下から引き出すことは、なかなかできなかった。［中略］女中が控えの間を最初に通り抜けたとき、僕は最後の文を書き記した。ランプを消すと、明るさはもう昼間のようだった」[1)]。カフカによって「一気に」産み落とされたこの物語は、執筆の速度だけでなくその内容の展開もまた速く、読者としては物語の筋についていくことが非常に難しい。ここに簡単にあらすじを述べることにする。ある晴れた日曜の午後、青年実業家のゲオルク・ベンデマンはロシアで暮らしている友人に手紙を書く。彼はこの手紙の中で自分が財産家の娘フリーダと婚約したことを打ち明けようとしたが、ずいぶんと長いこと躊躇する。というのも、異郷に住む友人は商売がうまくいっていないのだ。事業が栄えて、婚約相手も見つけた自分とは、あまりに幸不幸の差が激しかったからであ

---

1) Kafka, Franz: Tagebücher 1912-1914. In: Franz Kafka Gesammelte Werke in zwölf Bänden. Bd.10. Fischer Taschenbuch Verlag. Frankfurt am Main. 1994. S.101
なお、本稿ではカフカの既訳にこだわらず、引用に関しては全て訳出し直した。

る。ゲオルクは手紙を書いたことを報告がてらに、病に臥せっている父親の部屋を、ひと月ぶりに訪れる。父親はゲオルクを声高に非難し、次第に激高する。当惑したゲオルグは父親をベッドへと促し、毛布で全身を包み込む。すると父親は突如攻勢に転じ、ベッドの上に立ち上がり、婚約することも友人へ手紙を書くことも勝手な行為だとゲオルクを叱責する。そして息子に、「おまえは確かに本来罪を知らぬ子供だったが、より本性的には悪魔のような人間だったのだ！－だからこそ心得よ、私は今おまえに溺死の刑を申し渡す！」[2] と声を張り上げる。ゲオルクは部屋を飛び出して橋へと向かい、そこから川に身を投げる。

カフカの主要作品は 1912 年頃から続々とこの世に生み出されており、『判決』はその中では最も早い時期に書かれた作品の一つである。ゲオルクとその友人、すなわち婚約者と独身者による対比構造を題材とした作品は『判決』以前にも見られるが、語り手の視点という観点でその性質は大きく変化している。例えば『ある戦いの記録』においては、語り手の視点は ich のまま独身者のもとに固定されているが、その独身者を今度は対象として見つめるとき、視点は完全に婚約者のもとに移動している。いわば常に ich が他己紹介を続けるように、必要に応じてその視点は両者のあいだを行ったり来たりしているのである。しかしこの『判決』では、語り手は er で完全に固定されている。そのため、婚約者も独身者も自らが意識していない、または知り得ない要素を描くことができるようになっている。例えば、友人が帰郷して仲間と再会すれば、自分の不遇に心を痛めるだろうとゲオルクは考えるが、これはあくまでも彼の推測に過ぎず、語り手も彼の心の内を説明することで物語を補完したりはしない。ヴァルター・ゾーケルの言葉を借りれば、この手法により両者が意識上で認めていることと実際の態度とのあいだにある境界を表現できるようになり、「カフカエスク」と呼ばれる叙述構造に到達したのだ[3]。実験的な創作ゆえであろう

---

2) Kafka, Franz: Ein Landarzt und andere Drucke zu Lebzeiten. In: Franz Kafka Gesammelte Werke in zwölf Bänden. Bd.1. Fischer Taschenbuch Verlag. Frankfurt am Main. 1994. S.52

3) しかし厳密には、1911 年 2 月 21 日の日記において、カフカは『都会風の世界』という習作を書き遺しており、すでに三人称の主人公が描かれている。

か、カフカには珍しく、ブロートが編集する文芸年鑑『アルカディア』にこの作品を寄稿している。ところで、1912年には『判決』や『変身』、次いで1914年から1915年にかけて『審判』や『流刑地にて』が完成するが、これらの初期作品には共通点が多い。上記の通り、『判決』のゲオルグ・ベンデマンは、父親からの死刑宣告を受けて川に身を投げる。『変身』のグレーゴル・ザムザは、ある朝毒虫へと姿を変えて、徐々に身を滅ぼしていく。『審判』のヨーゼフ・Kは、身に覚えのない罪で突如逮捕され、物語の最後に処刑される。『流刑地にて』に登場する士官は、囚人の身代わりとして処刑機械に身を横たえ、自らに刑罰を与える。全ての作品において、登場人物が何かしらの罪を犯したとみなされ、もしくは本人が罪の意識を自覚し、その命を落とすかたちで物語が終幕を迎えている。彼らが実のところ有罪であるか無罪であるかは、読者の解釈に委ねられている。

先行研究には、ゲオルクとその友人を、現実の俗世に生きる人物と文学の聖性に身を置く人物として対比しているものが多い。カフカは一方では世間で行われている経済活動に積極的に参加し、結婚して家庭を築くことに憧れをもっていたが、もう一方では世間からは距離をとって禁欲的な隠遁生活を送りたいと願っていた。この相反する願望をゲオルクと彼の友人という二人の登場人物に託したという解釈である。ゲオルクは父親の事業を引き継ぐことを前提に共同経営をし、裕福な家庭の娘との婚約も交わした。彼の友人はロシアへと逃れ、商売はうまくいかないものの、己の信じる道を歩んでいる。このロシアという国名のもつ響きは、カフカには独特のものであったらしい。例えばカフカは日記の中に『カルダ鉄道の思い出』という小品を書き遺しているが、これも鉄道会社に雇われてロシアの奥地へ赴くことになる男の話である。主人公は冒頭で「あの地にいたときほど孤独だったことはない」と述懐するが、ロシアは中欧から見てただ距離的に遠方に位置しているだけでなく、ヨーロッパ的基準から逸脱した、ただひたすらに孤独な場所として認識されている。カフカが作家として「書く行為（エクリチュール）」に身を捧げることを望みつつも、文学という「唯一の要求で

学生であるオスカル・Mが、堕落した生活ぶりを父親に非難される物語である。

あり唯一の天職」[4] とは対極に位置している、労働者傷害保険協会での職務に励まなければならないという現実世界での悩みが、ペテルブルクで自らの信念に従って生活し、信仰者の謙虚さや自己犠牲の精神をもつ友人の姿に憧れを抱くゲオルクとなって描かれている[5]。禁欲的な隠遁生活に身をおいて「書く行為」に没頭するために、ゲオルクは命を絶っていわば世俗から距離をとろうとしているという解釈は、カフカが遺した日記や手紙の文面から鑑みても大きな説得力をもっている。創造する者は、生活（エグジスタンス）から己を分離し、己を解き放ち、生活から超然とすることを強いられる[6] からである。

しかし、この短編小説に向き合った読者の多くが抱く疑問は、なぜ父親はゲオルクを突如罵り出すのか、そして、父親が下した判決は不当なものにもかかわらず、どうしてゲオルクは不服な表情を見せずに素直に従ったのだろうか、というものであり、その答えが物語中のどこにも見当たらない点に、我々は大きな違和感を覚える。事業は軌道に乗り、婚約者との明るい未来が約束された男が、父親の死刑判決に異議さえも唱えることをしない。カフカらしい喜劇的な描写だと匙を投げる前に、本稿では作品の中に幾度となく登場する病的な表現と、カフカが用いるいくつかの着目すべきモチーフを手がかりに、『判決』の一つの読み方を提示したい。

1　作品中に登場する病の徴候

> そのように彼は馴染みのない土地でくたくたになるまで働いたが、それは無益なことだった。彼の顔一面に生えた異様な髭も、子供のころから見慣れた顔を覆い隠すことはできず、顔の黄色い皮膚の色は、進みゆく病気を暗示しているように思われた。［中略］彼はそうして最

---

4) Kafka, Franz: Tagebücher 1912-1914. S.192
5) マルト・ロベール：『カフカのように孤独に』、東宏治訳、人文書院、1985年、185-187頁
6) モーリス・ブランショ：『増補　カフカ論』、粟津則雄訳、筑摩書房、1977年、29頁

期まで独身主義を貫く心構えをしていたのだ[7)]。

生家での暮らしに我慢できずにロシアのペテルブルクへと移住し、そこで商売をしている友人の描写である。その友人に故郷へと帰ってくるよう説得しようかどうかゲオルクは思い悩むが、彼を生家に戻すことはできないであろうと考える。そんなことをすればかえって彼は「忠告されたために捻くれて、友人たちとはもう一段階疎遠になってしまう」[8)] ことが目に見えたからである。仮に帰郷できたとしても、「友人たちの中には解け込めず、そして彼らなしでは勝手がわからないだろう」[9)]、とゲオルクは予測している。ゲオルクにとっては、資産家の令嬢フリーダ・ブランデンフェルトと婚約したことを手紙で伝えるよりも、あまり意味のない出来事を書くほうが「はるかにまし」[10)] なのだ。ここで考察したいのは、ゲオルク、その友人、そしてカフカの関係である。カフカは作品を書き終えた後の 1913 年 2 月 11 日の日記に、『判決』に関してのヒントを遺している。Georg と Franz は同数の母音から作られており、Bendemann の Bende と Kafka もまた同数の母音を持つ。一方で Frieda には Felice と同数の母音があり、Brandenfeld は Bauer と同じ頭文字となっている。多くの先行研究者たちが指摘しているように、ゲオルクはカフカ自身の、そしてフリーダはフェリーツェの投影であり、二人の実生活における出会いが物語に反映していると考えられる。『判決』のタイトルと並んで、Für F.との献辞が添えられていることにも、これで納得がいく。しかし、ゲオルクがそのフリーダよりも執着しているのが、ロシアに住む友人の話である。父親に判決を下される結末の部分以外、フリーダとのやりとりも父親との応酬も、共にこの友人について語られている。それにも関わらず、この物語中に友人の名前は一切登場しない。カフカが一方で経済人として社会に参画し、結婚生活を営むことを望みながら、もう一方では禁欲的に文学に身を捧げたい

---

7) Kafka, Franz: Ein Landarzt und andere Drucke zu Lebzeiten. S.39
8) Ebd. S.40
9) Ebd.
10) Ebd. S.42

と願っていたことについては前項で述べた。前者をゲオルク、後者を彼の友人が体現しているとすれば、ゲオルクと彼の友人は卑俗な現実と文学の聖性という二律背反の関係性を示しているというよりはむしろ、双方ともカフカそのもの、つまりカフカの現在と未来を表象しているのではないかと推測できる。「進行しつつある病気を暗示」するような顔色、そしてフェリーツェと頻繁な文通を交わしていた時期でありながらも、「一生を独身で過ごす準備を整えている」という状況、まさに結核と結婚に苦慮する、カフカのその後の人生を予見しているかのような人物描写である。この時期のカフカは、職業としての文筆活動を両親、とりわけ父親に認められないことに対する空しさを頻繁に綴り、またそんな自分が家族にとって唯一の異分子であり、不要な存在であると繰り返し思い悩むのだが、その際に家族という身体にとって、自らがまるで病原菌であるかのような描写をしている。自分は「家族を破滅させる者」であり、「ただ破壊作用のみを及ぼし」、そして「今ではFをそれほどにも必要としているすべての人びとの抵抗力を削ぎ、父親の死に尽力し」[11] ているというのだ。カフカが医者によって肺結核であると診断されるのは1917年に喀血した直後であるため、自らの病状についての描写が1912年時点での作品中に登場するべくもない。しかし、まるで自分が病原菌やウイルスであるかのような表現は、彼を取り巻く時代背景、そして病の文化史の影響を受けていることは間違いないと断じていいだろう。

当時の病に対する認識を明らかにするために、まずは病の文化史を概観する。1865年に結核が伝染病であることが確認され、1882年にはコッホが結核菌を発見し、その後彼はワクチンの精製にも成功している。20世紀に入り、衛生施設の改善に伴って結核に罹患する人口は次第に減少していったが、感染してしまった患者の死亡率は依然として高かった。大きな理由として、医学的見地からワクチンをはじめとする解決法が提示されていたにもかかわらず、20世紀半ばにさしかかっても衛生学的な食事療法と転地療法、そしてサナトリウムでの生活が、一般的に推奨されていたこ

---

11) Kafka, Franz: Tagebücher 1914-1923. In: Franz Kafka Gesammelte Werke in zwölf Bänden. Bd.11. Fischer Taschenbuch Verlag. Frankfurt am Main. 1994. S.61

とが挙げられる[12)]。1944年にストレプトマイシンが発明され、1952年にイソニコチン酸ヒドラジドが使用されるようになって、ようやく結核に対する正しい認識と治療法が広く行き渡ることとなった。医学が結核菌を撲滅し始めると、それまで人びとが結核に関して抱いていた神話や隠喩が解き放たれ、現代のインフルエンザなどと同様の、ありふれた、そして決して怖くはない伝染病として扱われるようになる。カフカが『判決』を執筆した20世紀の前半は、結核に関する隠喩がまさに転換を図る時期であった。人々が結核に対して伝統的に有していた「ロマンティックな」印象、例えば、激しい恋や芸術的感性を胸に秘め、その欲望や才能の大きさゆえに、自らの身体を自己破壊的な炎で焼き尽くすといった印象は、後に狂気がもつイメージの一部を先取りしていたとも言えよう。具体的に述べれば、患者の特徴が「熱っぽく」「向こう見ずで」「情熱的」、ときに「極端な行動」をとり「卑俗な日常生活の恐怖に耐えられないほど感受性が強い」というイメージが、結核から狂気へと受け継がれていったのである。結核と狂気には対処方法にも共通点がある。それは罹患した者を他の者たちから隔離し、特定の施設に収容する「監禁」である[13)]。どちらの病も快癒するためには日常世界の外に連れ出さなければならないと考えられたため、サナトリウムや精神病棟に患者は閉じ込められ、日常世界とは異なる法の下で生活しなければならなかった。

無論、結核という病名はこの作品中に登場しない。しかし、ペテルブルクに住む友人の「顔の黄色い肌色」に病の予兆が見いだせるだけでなく、『判決』の中で結核患者の役割を最も色濃く担っているのは、間違いなく父親であろう。後に引用する描写に見られるように、「暗い部屋」、「弱った視力」、「衰えた食欲」、閉め切った「窓」、広がった「瞳孔」、「弱々しい」様子、「清潔でない下着」など、父親とその父親が養生している部屋の様

---

12) カフカは患者として療養に訪れる以前からサナトリウムに関心を示していた。1905年、1906年の時点でツックマンテルのサナトリウムを訪れていて、当地での体験が『田舎の婚礼準備』に描かれている。

13) スーザン・ソンタグ：『隠喩としての病い　エイズとその隠喩』、富山太佳夫訳、みすず書房、1992年、53頁

子は、当時の結核患者を連想させるのに充分な隠喩に満ちている。結核はゲオルクの部屋のような燦々と光の差し込む場所ではなく、父親の部屋のように薄暗く、空気の停滞した、衛生的ではない場所で広がるとされていたからである。ゲオルクは父親に向かって具体的な病名を挙げたりはしない。が、結核患者にその病名を秘匿しておくことは、結核という病名が当時有していた死刑判決にも似た響きを考慮に入れれば、至極当然のことであったと考えられる[14)]。仮に患者本人が自らの病状を認識していたとしても、家族や親しい人間が本人を前にして結核の名を出すことは考えにくい。10年ほど後になって、死の二ヶ月前にカフカは友人に手紙を書いているが、そこにはサナトリウムにおける患者を取り巻く状況が生々しく描写されている。「言葉では、むろんはっきりとしたことは知らされていません、というのも、誰もが喉頭結核の話をするとき、遠慮がちで避けるような、それでもって目つきが据わるような口調になるからです」[15)]。

カフカが自然科学的に実証された近代医療を信用せず、むしろ自然療法を信仰していた点についても、様々な記述が日記や手紙の中に散見される。彼が評価していたのは自然科学の寵児である医者よりも、むしろ薬物を用いずに患者を美術館へと連れて行くことを提唱した、人智学者のルドルフ・シュタイナーであったようだ。カフカは冬でも薄手の外套しか身につけず、体調が優れないときも薬を飲まずに冷水を浴びるなど、常に心身を鍛えることでの快復に努めた。ギムナジウム卒業後もプラハ市立体育館に通い、そこで柔軟体操や器械体操を定期的に行っていたが、まさに『判決』を執筆している時期に彼がしていた体操は、デンマークの体操家で教育者でもあるJ・P・ミュラーが『わが方法』で紹介したものであった。物語の最後でゲオルクが川に飛び込むとき、「優秀な体操選手らしく（欄干を）ひらりと飛び越えた」[16)]と描かれている。なぜ突然「体操選手らしく」という比喩が登場するのか、死を決意した場面ゆえに、滑稽な印象を拭えない。だが、これこそカフカ自身の生活が投影されている箇所なのだ。ミュ

---

14) スーザン・ソンタグ：『隠喩としての病い　エイズとその隠喩』、10頁
15) Kafka, Franz: Briefe 1902-1924. Fischer Verlag. Frankfurt am Main. 1958. S.480
16) Kafka, Franz: Ein Landarzt und andere Drucke zu Lebzeiten. S.52

ラーが提唱したのは身体のありかたを見直すトレーニング方法だけでなく、個人と社会双方の革新を目指す、生活の哲学でもあった[17]。カフカはそのミュラーの教本に従って、1917年に喀血するまでのほぼ毎日、開け放した窓際に裸で立ってこの体操を続けていた。また、晩年になって咽頭結核の症状が進行してから訪れたホフマン・サナトリウムでは、ホフマン医師の療養方針により、結核の治療法を「5つのL」に限定していた。すなわち、患者の抵抗力を高めると信じられていたLicht（光）、Luft（空気）、Landaufenthalt（転地）、Lebertran（肝油）、そしてLiebe（愛）である[18]。カフカも後に「サナトリウムと医者による治療はむしろ健康に悪く、私に必要なのは太陽と空気と田舎と菜食料理だけだ」[19]という手紙を書き遺しており、ここからも彼がいかに近代医療を軽視し、自然療法に親近感を抱いていたかが見てとれる。

> こんなによく晴れた午前であるのに父親の部屋はなんと暗いことか、とゲオルクは驚いた。幅の狭い中庭の向こう側にそびえ立つ高い塀が、その暗い影を投げかけていたのだ。父親は故人となった母親を偲ぶ、様々な想い出の品で飾られた隅の窓際に座り、新聞を目の斜め前に支えて読んでいたが、それは彼が何らかの弱視を補おうとしていたためだった[20]。

> 「お父さんはこんな暗闇の中で座っていますが、居間にいらっしゃれば心地良い明るさですよ。ちゃんと腹ごしらえをしないで、朝食はちびちびとしか食べていないようですね。それに、閉めきった窓のそばにいらっしゃいますが、風が入ればお父さんの身体にとても良い影響をもたらすでしょう。そうですよ、お父さん！僕は医者を呼んできま

---

17) マーク・アンダーソン：『カフカの衣装』、三谷研爾・武林多寿子訳、高科書店、1997年、139-140頁
18) ロートラウト・ハッカーミュラー：『病者カフカ　最後の日々の記録』、平野七濤訳、論創社、2003年、134頁
19) Kafka, Franz: Briefe 1902-1924. S.261
20) Kafka, Franz: Ein Landarzt und andere Drucke zu Lebzeiten. S.44

す、医者の処方に従わねばなりません」[21)]

父親の身体を安楽椅子から起こし、今やかなり弱々しく立っている父のナイトガウンを脱がせた[22)]。

そう言っているあいだにゲオルクは、父親を元通りに腰掛けさせて、リンネルのパンツの上に履いていたトリコット地のズボンと靴下を、慎重に脱がせることに成功した。あまり清潔でない下着を見たとき、ゲオルクは父親をほったらかしにしてきたことで自分を責めた[23)]。

物語の後半になると、表通りに面した光り溢れる温かなゲオルクの部屋から、日が当たらない暗い父親の部屋へと場面が移行する。ゲオルクはひと月ぶりに父親と対峙し、父親の健康が予想以上に衰えていることに驚く。窓が開放的に開け放たれた、ゲオルクの部屋の明るいイメージとは対照的に、父親自身と彼の部屋の描写は薄暗く、結核患者が生み出される環境を連想させる。窓際なのに「暗い部屋」、「弱った視力」、「衰えた食欲」、風通しをよくすべきなのに閉め切った「窓」、異常に広がった「瞳孔」、「弱々しい」様子、「清潔でない下着」…。結核などの病原菌は、まさにこのような風通しや日当りの悪い、不衛生な部屋で繁殖したと考えられていた。この部屋の描写は、スーザン・ソンタグの『隠喩としての病い』において語られる、結核に与えられた負のイメージとも見事に合致する。乏しい衣料、痩せた体、暖房のない部屋、ひどい衛生設備、栄養不足の食物[24)]。何よりもゲオルクが「なおざり」にしてしまったと後悔するほどに、父親はこの薄暗い部屋に長きにわたって引き籠っている。結核は当時流行していた他の伝染病と比較しても極めて羅病期間が長く、死に至る病状の進行も緩慢であった。したがって同じ隔離処置を施されたライ病患者とは異な

---

21) Ebd. S.46
22) Ebd. S.47
23) Ebd.
24) スーザン・ソンタグ：『隠喩としての病い　エイズとその隠喩』、21 頁

り、病状の進行の緩慢さゆえにサナトリウムでの結核患者の生活は決して「世俗的な死」などではなく、独自の魅力を持つ「別世界」であり、「生の一形式」[25] に属すると考えられた。患者を診る医者や、看病に携わる家族に求められることは、患者の病を完治させることではなく、助かる見込みのない病人だとしても、ある程度の満足を提供し続けるような生活環境を整えることになる。患者である父親を「なおざり」にしてしまったゲオルクの後悔の根底には、結核患者が集まり独自の世界を形成していたサナトリウムのイメージが、強く残っているのではないだろうか。

2　結核と労働

前述のソンタグは結核をめぐる空想を経済活動、とりわけ資本主義が有する蓄積の性格とも重ね合わせている。19 世紀の後半には、肺結核は遺伝病であり、感染するのは芸術的な感性を持ち、それゆえに情熱に蝕まれた裕福な者、とりわけ青年や女性であると依然として信じられていた。結核患者の青白い顔面とぎらつく眼差しは、自己破壊的な魂の炎であるとされてきた。しかし対照的に、紛れもなく労働者の病気でもあった。農村から大都市へと移動してきた多くの労働者が、資本主義という社会変革の荒波の中で、この病気に苦しめられたのである。風通しや日当りの悪いところで病原菌が繁殖すると思われていたのも、多くの労働者が住んでいたあばら屋のイメージに起因しているのであろう。すなわち、結核はこの時代において、芸術に対する情熱やサナトリウムでの享楽的な生活を表象しつつも、同時に労働者の過労や貧困、不衛生な生活を想起させる病気でもあった[26]。19 世紀から 20 世紀初頭にかけての初期資本主義の時代は、投機や新しい欲求を無尽蔵に算出していくその後の高度経済成長期や修正資本主義の時代とは異なり、大量生産・大量消費といった、歯止めの利かない過剰な経済活動には至っていなかった。しかし欲望を満たすことが「消費」につながるとするならば、個人が経済活動を行うに際して限度があること

---

25) クロディーヌ・エルズリッシュ、ジャニーヌ・ピエレ：『〈病人〉の誕生』、小倉孝誠訳、藤原書店、1992 年、58 頁
26) 同上、55 頁

も事実である。自らの才能がおこす生命力の炎を適切に管理すれば、芸術家はその命を縮めることなく作品を創造し続けることができる。しかしその管理が不得手なゆえに、生命力を全力で燃やし続けながら芸術活動に従事し、ついには夭逝してしまう。このような芸術家と結核患者に対する迷信が、自らの財を適切に「消費」するのではなく、必要以上に「浪費」してしまう人間、またはそのような環境を創出した資本主義社会そのものと重ねられたのである。結核は当時の経済人の負の活動と関連付けられ、結果として「浪費」や「生命力の消耗」を連想させる病となった[27)]。個人の持つ限られたエネルギーを適切に消費できなかった結果、意志が薄弱してしまう、もしくは逆に意志が加熱し過ぎる結果を招く。持ち得る経済力を適切に消費できない者、ないしは経済活動の限度を知らずに欲望が暴走する者は、健常な社会生活を送ることができない。このようにエネルギーと感情が結びつく病理という点においても、結核は20世紀以降の狂気の描写と酷似しているのだ。ところで、カフカの担当医もまた、精神的な諸症状も含め、全ては結核にその原因があると考えていた。「医者にとって、世界はなんと単純化されていることだろう！僕の胃の機能不全、不眠症、不安感、要するに僕の今日あるのは全て、そして僕の持ち得るもの全てが、彼に言わせれば肺の病に起因している。この肺の病は発現しないあいだずっと、まさに胃や神経の機能不全という仮面を被っていたのだ」[28)]

結核の隠喩をあぶり出すために精神病を引き合いに出すのは、現在の我々にとって精神病のほうが、病の有する隠喩または偏見を身近に感じ取ることができるからでもある。精神疾患をもつ患者たちが精神病棟に幽閉されたのと同じ理由で、結核患者たちもまた日常世界の外に連れ出されなければならなかった[29)]。治療のためには空気が澄み、気候が良好な場所へと旅行することが適しているとされていた。この意識の背後には、労働者階級の生活があまりに不衛生であり、結核菌が繁殖する温床になっているという衛生学的な根拠もあったが、彼らの置かれている環境そのものに対

---

27) スーザン・ソンタグ：『隠喩としての病い　エイズとその隠喩』、96頁
28 Kafka, Franz: Briefe 1902-1924. S.285
29) スーザン・ソンタグ：『隠喩としての病い　エイズとその隠喩』、53頁

する社会的な負荷があまりに大きいとする考え方が、当時すでに芽生えていたからである。朗らかな雰囲気に囲まれて、ストレスから解放され、家族とは別居し、健康な食事をし、そして充分な休養をとることを医者は勧めた。すなわち、都会からの逃避である。この状況は結核という流行病のもつ社会的な背景を概観すれば、その反動であることは明白だ。19 世紀後半からドイツにおいても産業革命が急速に進展し、普仏戦争の賠償金を元手として交通インフラに大量投資したこともあって、農村から多数の人口が産業地帯の集中する都市に流入した。ベルリンやハンブルクに代表される大都市の人口は、1871 年の時点ではわずか 5 パーセントに過ぎなかったが、1890 年代には 21 パーセントにまで達していた[30]。過酷な労働条件と不衛生な生活環境の下で、産業革命により生み出された都市スラムを中心に、「白いペスト」と揶揄された結核は一気に拡大した。大都会が抱える貧困や病理は深刻の一途を辿り、結核、梅毒、そしてアルコール中毒の恐怖が、大きな社会問題となって顕在化してきていた。ドイツでは 20 世紀初頭の 10 年間で、結核患者だけで約 20 万人の死者が出たという[31]。興味深いのは、結核の慢性疾患に影響を与えたものが、栄養不足や衛生管理といった自然科学的な要因だけではない、と当時すでに考えられていた点である。農村で生活していたときには全く不満を覚えなかった価値観が、都会の環境で揺らぎ、知らず知らずのうちに蓄積した心理的ストレスが、結核の原因となったという見解である。資本主義による経済繁栄と合理化に疲れ、自らの能力を超えた浪費によって病んで健康を損ねてしまった者たちは、病的な都会の生活を捨てて大自然へと帰着することで、文明に毒された肉体と精神を癒そうという衝動に駆られた。この文明病からの逃避が、無政府主義、国粋主義、神智主義、神秘主義、社会主義、共産主義などの様々な思想に裏付けされ、1890 年代半ばから 20 世紀にかけて普及した生活改善運動（レーベンスフォルム）に結びつく[32]。自然科学的な医療が劇的な進歩を辿って

---

30) 関根伸一郎：『アスコーナ　文明からの逃走　ヨーロッパ菜食者コロニーの光芒』、関根伸一郎著、三元社、2002 年、8 頁
31) 同上、9 頁
32) 同上、11-12 頁

いるにもかかわらず、多くの結核患者が自然に囲まれたサナトリウムで静養することを望んだのは、資本主義のもたらす消費活動から、一定期間距離をとることが必要だと考えたからであろう。

カフカは1908年から1922年までボヘミア王国労働者傷害保険協会プラハ局に勤めていた。担当した企業を査定して傷害危険度別に分類し、その分類に対して異議申立てが行われた場合には、訴訟を処理するというのが彼の仕事であった。仕事ぶりはいたって真面目で、第一次世界大戦時には保険協会から「業務上不可欠」な人材として、兵役免除の申請を受けたほどであった。加えて退職前には、秘書官主任にまで出世を果たしている。保険局で企業の査定を担当するうちに、カフカはその業務の職種上、当時の資本主義のもたらした弊害と真っ向から向き合わざるを得なかったことは想像に難くない。適切な消費活動に失敗し、社会から放逐された労働者を間近に見てしまった可能性もあるだろう。経済活動にまみれた都会から自然への回帰と、結核菌のはびこる都会からサナトリウムへの逃避。この二点がカフカの中で一つの明確な方向性を得たとき、『判決』のゲオルクは自分の部屋を離れて、判決を受けに父親の元へと向かう決心をする。カフカは1913年にガルダ湖畔の街リーヴァにあるサナトリウム、ドクター・ハルトゥンゲンを訪れた。自然療法の提唱者の一人であったクリストフ・フォン・ハルトゥンゲン医学博士も、近代の病の徴候について以下のように語っている。

> 「現代の生活は、大都市の人間に機械部品としての徴候を与える。［中略］大衆の中の一個人は、車輪か、車輪の歯車として働くしかなくなったのだ。［中略］何らかの形として個人として活動したい欲求［中略］が不可能ならば、〈個人として〉は病むより他にないのであり、［中略］どんな医者も彼のことを理解できず、その病気を治療することもできない。かくして、彼はサナトリウムを訪れる。したがって、そのような施設に入ることは、いわば時代の欲求なのだ。つまり、そういう場所で、患者は個人として扱われたいと思うのである」[33)]

---

33) ロートラウト・ハッカーミュラー：『病者カフカ－最後の日々の記録』、15頁

（『週間臨床・治療』第 22 号、1912 年）

21 世紀に生きる我々にとって、非常にわかりやすい論理である。サラリーマンは所属する企業の一つの歯車に過ぎず、その企業はさらに大きな企業の歯車に過ぎず、どんな大企業もその国の、そして世界の経済の中では一つの歯車に過ぎない。雇用者が被雇用者を労働力とみなすかぎり、病に倒れた者は労働力に計算できない無能な存在となってしまう。病人は働くことができないだけではなく、もし入院するとなれば、社会にとっても二重の負担となりうる。すなわち、放っておかれた病人の家族は貧窮の恐れに曝され、その一方で病人を保護する目的で行われた隔離は、かえって病を無限に増殖させてしまう[34]。したがって安定的な労働力を確保するためには、被雇用者を健康な状態に保ったほうが、はるかに効率が良い。19 世紀以降はこの「健康＝労働力」という思想の下で、被雇用者側は健康を損なわない程度の労働条件を主張する運動を起こし、雇用者側は社会保障を制度化することで、常に健康な労働力を手にすることを求めた。その結果、被雇用者は「病人になって、治療を受ける権利」を失い、「健康でなければならない義務」[35] を負ったのである。人類は何千年という長い労苦に満ちた発展ののちに、太古の原始時代からようやく脱出して、自由な個性的自己を規定できる段階までたどり着いたにも関わらず、産業世界によって今またあの太古の原始時代へと逆戻りするのである。現代におけるこの人間性の剥奪が、原始時代の人間以前の世界へと逆行している、とカフカは作品の中で度々訴えている[36]。『判決』の中で若くして父の仕事を引き継いだゲオルクは、資産家の娘フリーダとの婚約を通して、ますますその経済的地位を安泰にしてゆく。しかし、ペテルブルクで思うように仕事が成功しない友人や、息子に自分の事業を徐々に譲っていった父親とは異

---

34) ミシェル・フーコー：『臨床医学の誕生』、神谷美恵子訳、みすず書房、1969 年、38-39 頁

35) クロディーヌ・エルズリッシュ、ジャニーヌ・ピエレ：『〈病人〉の誕生』、91 頁

36) Emrich, Wilhelm: Franz Kafka. Athenäum Verlag. Frankfurt am Main. 1958. S.227-228

なり、資本主義社会の歯車として働き続けなくてはいけないゲオルクには、病に倒れる権利も与えられていない。事実、結核の表象に身を包んだ友人や父親と比べて、ゲオルク自身はいたって健康的な描写しかされていない。彼は黄色い肌色の顔を持たず、薄暗い部屋で窓を閉め切ることはなく、不衛生な下着を身につけることもない。

19 世紀に入り、顕微鏡や観察技術の発達に代表される医学の劇的な進歩により、身体の内部に隠されていた神秘はいっそう乱暴にそのベールを剥がされてきた。肉眼で確認できない細菌やウイルスが病の根源として巣くっていたとしても、実際に症状が顕在化していなければ、病人は病を自覚できない。しかし病人が自覚する前に、医学が病の存在を立証してしまう時代がやってきたのである。18 世紀以前の医学では健康であったはずの身体も、今日の健康診断の精度をもってすれば、何かしらの病を発見できてしまう可能性は高い。しかも徴候となって病が発現するよりもずっと前に。発達した医学と科学技術が人間の感覚を超越してしまった 19 世紀の後半からは、患者は症状を自覚する以前に「病人」というレッテルを貼られてしまう、奇妙な逆転現象が起こるようになった。人間ドックなどの精緻な定期検診が義務化されている現在の社会においては、なおさらのことである。このようにして、病人を病人たらしめているのは周囲の人間でもなく、医者でもなく、患者である病人自身の判断に委ねられた。自分は病人である、したがって病人らしく振る舞わなくてはならないと意識することによって、自らと健康な者との差別化を図る[37)]。社会が要求するシビアな健康管理は、真に健康な者の絶対数を時代とともに減らしてゆく。そして病人は医者の専門的な助言の下で、最終的には本人が自覚するかどうかという主観的な方法で自らを病人に分類する。健康と病の境界線が曖昧であるだけに、他人と比較して、より健康な状態から遠いところにいると判断された者が、病人となってしまう。潜在的な病人ばかりの近代社会においては、こうして相対的に病人が生産されるのである。健康であること、つまり肉体の機能における正常性というものは、ここでは完全に浮き彫り

---

37) ジョルジュ・カンギレム：『生命の認識』、杉山吉弘訳、法政大学出版局、2002 年、194 頁

にされた形象となり、一つの抽象的なバロメーターに過ぎない。病気についての経験を解明するために、常にその正常性から出発するからである[38)]。見方を変えれば、自分の周囲により病的な存在さえあれば、自分の健康が担保されることにもつながる。前項において、顔が黄色い肌色となった友人はゲオルクの分身である可能性を論じた。彼の顔には、確かに病気の予兆がすでに顕在化している。しかし結核の隠喩にまみれ、産業社会から隔離された部屋での生活を余儀なくされている父親を前にすれば、ゲオルクもその友人も、そしてカフカ自身もまた、相対的には健康な状態になり得るのだ。

3　時計とベッド

ゲオルクが判決通りに川へ身を投げようと部屋を飛び出す最期が、あまりに強烈な印象を我々に残すため、ゲオルクが父親の部屋を訪れた物語の後半以降、二人の応酬がどのあたりからその性質を変えているのかがわかりにくい。私は、ゲオルクが父親をベッドに運ぶ場面が一つの転機になっていると考える。なぜなら、それまで父親は息子ゲオルクの言い分に大人しく耳を傾けていたにもかかわらず、身体を休めるはずのベッドに身を横たえてから、急に生気を取り戻したかのように、反撃を始めるからである。この部分でカフカがおそらく意図的に用いていると思われる表象を、本稿では二点列挙する。時計とベッドである。

> ベッドへと向かう数歩のあいだ、父親が自分の胸元にあった時計の鎖を弄んでいるのに気づいて、ゲオルクはぞっとした。彼は父親をすぐにはベッドに寝かせることができなかった。それほどしっかりと父親はこの鎖につかまっていたのだ[39)]。

これはゲオルクが父親を両腕に抱えて運ぶ際の描写である。父親はゲオルクの時計を強く掴んで離そうとしない。その行動を見たゲオルクはぞっ

---

38) ミシェル・フーコー：『臨床医学の誕生』、59 頁
39) Kafka, Franz: Ein Landarzt und andere Drucke zu Lebzeiten. S.48

とし、我々読者も強い奇異の念を覚える。その原因は父親の幼児的な行動にあるのかもしれず、また病に伏している姿からは想像し辛い、強い力と意志をそこに見出だしたからかもしれない。懐中時計は当時、身につけた者の社会的地位を表す道具だった。つまりこれは息子が父親に代わって一家の中での経済的地位を手にしたという父権奪取、そして世代交代の構図である。会社を経営して財を成した父親は、ゲオルクの母親の死後は病気がちとなり、息子に商売を任せたために、経済力の面では父子の立場が逆転している。時計の鎖を握って離さないという行動に、父子の絆にもう一度縋ろうとする父親の願いが垣間見える。時計とは、延々と流れる時間に人の法でもって単位を与えることであり、この世の時の流れを秩序付けるものである。ゲオルクが所有している時計を父親が掴んで離さないということは、時を操るゲオルクの権力を奪ってやろうという、家長としての権力への執着がなす反乱と捉えることができる。前述のように、ゲオルクの時計を弄ぶ場面から父親は父権を回復し始め、息子に溺死の刑を宣告するという結末につながってゆく。また、時の流れが有する権力性に着目すれば、ゲオルクが部屋に入ってきたときに父親が手にしていた新聞が、当日に配達されたものではなく、「ゲオルクは全く知らない名前の、ある古い新聞」[40] であった理由も想像がつく。通常の時間軸を逸脱し、時代から取り残されて、時の権力を失ってしまった老人を表しているのではないだろうか。ところでこの時計のメタファーを、カフカは『判決』以外でも時おり好んで用いている。

例えば遺稿の断片テクスト『ある注釈』の中では、教会塔の時計が自分の時計よりもずっと進んでいることを知って、道を見失ってしまう男が登場する。自らの力の及ぶ範囲よりも教会の持つ支配力のほうが強大であることを畏れて、我を忘れてしまう男の様子が描かれている。また、最初の長編小説『失踪者』において、主人公であるカール・ロスマンがホテル・オクシデンタルでエレベーターボーイとしての働く場面があるが、彼が持ち場を離れたという理由で職を解雇され、門衛主任に連れ出されるとき、

---

40) Ebd. S.51

「まるで狂った時計を見るかのように」[41] 扱われる。ホテルでの地位とそこでの労働に伴う収入を失い、より権力構造の上位にいる門衛主任を前にすると、カールの時の流れは狂ってしまうのである。さらに時期は 10 年ほど後になるが、オスカー・ポラックに宛てた手紙の中で、カフカは「時計は僕と何らかの個人的関係がある。［中略］僕が退職を申し出て以来（というか、より正確には僕が解雇する旨を通告されて以来、［中略］）一部は僕に背を向けはじめるものもある」[42] と書いている。仕事を辞めて社会的、経済的な立ち位置を失うと、同時に時の権力も我が身を離れ、時計でさえも正確に時を刻んではくれなくなるというのだ。

> 「私にはちゃんと毛布はかかっているかい？」と、足が充分に包まれているかどうか、まるで自分では確認できないかのように、父親が尋ねた。
> 「ほら、ベッドの中のほうが居心地いいでしょう」とゲオルクは言い、父親を毛布でよりしっかりと包んだ。
> 「ちゃんと毛布はかかっているかい？」と父親はもう一度質問し、相手の返答にとりわけ注意を払っている様子を見せた。
> 「まあまあ、落ち着いてください、ちゃんと布団はかかっていますよ」
> 「いいや、違うな！」と、ゲオルクの返答を遮るように父親は叫び、毛布を一瞬宙にすっかり広がるほどの力で跳ね飛ばし、そしてベッドに直立した。［中略］「おまえは私に毛布をかけようとした、わかっているさ、このろくでなしの息子よ、だが、私にはまだ毛布はかけられていないぞ」[43] [44]

---

41) Kafka, Franz: Der Verschollene. In: Franz Kafka Gesammelte Werke in zwölf Bänden. Bd.2. Fischer Taschenbuch Verlag. Frankfurt am Main. 1994. S.197

42) Kafka, Franz: Briefe 1902-1924. S.462

43) Kafka, Franz: Ein Landarzt und andere Drucke zu Lebzeiten. S.48

44) 諸家の指摘によれば、zudecken には begraben「埋葬する」の意味も隠されていることをここに書き添えておく。

息子にベッドへと運んでもらった父親は、はじめのうちは毛布が身体にかかっているか念入りに調べるものの、突如ベッドの上に立ち上がり、猛然と反撃を開始する。病に弱った身体を休めるはずのベッド、結核患者を想起させるベッドに入ったにもかかわらず、そこで水を得た魚のごとく生気を取り戻す父親の姿に、誰もが大きな違和感を覚えるだろう。ベッドの機能として我々が日常生活から思い描くものといえば、日々の睡眠を享受できる場所、または性愛が行われる場所としてのベッドであるからだ。さらに人間の一生を鑑みた場合、その誕生と終息もまた病院や自宅のベッドであることが多い。しかし、そもそもカフカの作品で、ベッドの上で安らかに生を終えるような物語があるだろうか。登場人物たちは水の中、檻の中、石切り場、橋の下、処刑機械の上等々、リアリズムからは遠く離れた場所で命を落としている。晩年はベッドの上からほとんど動けなかったカフカにとって、作品中のベッドは死を予感させる表象であって、我々が思い浮かべるような安らぎの場所ではないと考えられる。カフカの初期作品における類似性については冒頭で言及したが、このベッドという表象もまた、それぞれの作品において大きな役割を果たしている。『変身』において、グレーゴルが自分の姿が毒虫に変わっているのに気づいたのはベッドの上であり、『審判』において、ヨーゼフが突然逮捕されたのはベッドの置かれた部屋であり、『流刑地にて』において、士官が自らの身を横たえたのは、寝台式の処刑機械であった。そしてこの『判決』においては、ゲオルグに判決を下したとき、父親はベッドの上に屹立したのである。裁判長が判決を下す司法の高みが、まさにこのベッドによって表されている。公的な権力を行使する場所と私的な生活をおくる空間、双方が『判決』においては同じ寝室で同居している。

我々は今日、ベッドの置かれた寝室を、各部屋の中で最も私的な空間だと認識し、よほど親しい人間でない限りは、寝室まで他人を招き入れることはない。しかし、今日の寝室やベッドに対して抱いているイメージは18世紀頃に形成され始めたものであり、それまでは私的空間というよりも、むしろ社交の場、さらに言えば権力の集う場であったとも言えるようだ。例えばフランスのルイ14世の時代には、王や貴人の寝室は宮廷の中心部であり、かつ最上階に位置していた。王の政治的権力を象徴していた

ものが第一に玉座であったことは当然だが、王の寝室もまた、権力の集う象徴的な役割を有していた。王族と一部の貴族による専制政治の中で、王の一つひとつの所作が次第に儀式化され、ついには寝室での起床から就寝に至るまでの全ての所作が、宮廷儀礼として扱われるようになった。王の寝室に堂々と置かれている天蓋に覆われたステート・ベッドが、現代的感覚からすると過度なまでに装飾されているのは、寝室での所作が儀式化され、「見られる」ことを想定した作りになっているからである。貴人が死に瀕したときも、その身体を私的なベッドからステート・ベッドへと移すのが習慣であった。王や貴人の死もまた、決して個人的なものではなく、儀礼的な意味合いを帯びることを避けられなかったからである[45)]。また、王の寝室に入ることが許されていたのは一族、側近、そしてごく一部の貴族に限定されており、表に置かれた玉座よりもむしろ強い権力性を連想させるものであった。来客を歓迎する方法が時代と共に次第に変化し、18世紀に社交の場としてのサロンが定着する頃には、当時の寝室がもつ権力性はすっかり失われ、ベッドから儀式的な華美さも姿を消した。その時期からようやくベッドは快適性を求める家具となり、寝室はトイレや風呂と並び、家屋における最も私的な空間の一つに数えられるようになった。寝室は次第に人目にあまり曝されない奥まった場所に位置するようになり、それゆえに睡眠のみならず性愛が行われる場として、より人目をはばかる部屋となったのである[46)]。

父親のガウンを脱がせて、彼を両腕に抱えてベッドへと運ぶゲオルクの行動は、一見したところ父親を無防備な状態に貶め、その権力を簒奪するようではある。しかし、カフカの描く数々の物語において、ベッドが必ずと言っていいほど物語の転機部分に配置されていることを考えれば、少なくとも身体を休める寝具としての単一的な意味合いでベッドが用いられていないことは明白だ。社会的地位を息子に奪われ、病気がちになっていた父親は、ベッドの中で息を吹き返し、息子の婚約を批判し始める。そしてその糾弾はベッドの権力性を背にますますエスカレートし、最終的に父親

---

45) 多木浩二：『眼の隠喩　視線の現象学』、青土社、1982 年、236-237 頁
46) 同上、241-242 頁

は裁判長と見紛うほどの権力を手にし、息子に判決を下す。ゲオルクは父を表舞台からさらに遠ざけようとベッドへと運んだが、実のところ、権力の集う場へと誘導してしまったのである。

4　おわりに

本稿では、カフカの短編小説『判決』を、作品中に登場する結核を連想させる数々の表現と、権力性を暗示する時計とベッドという二つの表象を手がかりに読み解くことを試みた。顔が黄色い肌色となった友人はいわばゲオルクの分身であり、近い将来に結核で命を落とすかもしれない恐怖を強く暗示している。しかし、父親の事業を引き継いで安定した収益を上げていても、資産家の娘と婚約しても、成功する未来図を彼には描くことができない。なぜなら、権力の象徴である懐中時計を手にして経済活動を行う以上、ゲオルクもまた資本主義社会という巨大な機械仕掛けの中の一つの歯車に過ぎず、まるで生命力を過度に燃やしてしまう結核患者のように、適切な量の消費活動が行えないまま、生命力を無駄に費やしてしまう時期がいずれやってくるかもしれない、と恐れたからである。事業の一線を退いた父親は「病人になって、治療を受ける権利」をまだ有しており、その権利を行使して自分の部屋で療養している。しかし近代の産業社会のシステムに組み込まれたゲオルクは、「健康でなければならない義務」を負っており、それに従って常に労働力を提供し続けなければならない。病になることができるという人間性さえも、彼はすでに奪われてしまっているのだ。そのような人間が病から己を守るためには、暴力的な資本主義社会から距離をとるしか方法は無い。都会の生活を離れ、競争に疲弊した社会から距離をとり、負荷の少ない環境に身をおく必要がある。原始の世界へと向かう覚悟を決めたゲオルクは、明るい日の差し込む自分の部屋を出て、結核患者を想起させる父親の薄暗い部屋へと足を運ぶ。しかし、これは父親の看病に向かったわけではなかった。近代の自然科学が患者本人の自覚よりも先に病原を見つけてしまう以上、患者は自分自身の判断で最終的に病人にならざるを得ないのだが、もし周囲に健康な状態からより遠い存在があれば、自分を相対的に健康だとみなすこともできる。ゲオルクが父親の部屋に向かった真の目的は、見舞いではなく、友人への手紙をしたため

たことを報告するためでもなく、病に弱った父親を目の当たりにすることで、僅かな安心感を得るためではなかっただろうか。

ところが、ゲオルクの読みは外れ、父親はベッドのもつ権力性の助けを借りて、みるみる蘇ってゆく。もはや父親の部屋もゲオルクにとっては安心できる場所ではなくなった。彼に残された唯一の道は、父親の部屋を飛び出し、生活改善運動（レーベンスフォルム）の一環として都会を離れ、自然へと回帰することだけだった。自然療法を採用しているサナトリウムに滞在し、信奉している「太陽と空気と田舎の風土と菜食料理」に囲まれて身体を浄化する。「優秀な体操選手のように」「手すりを飛び越えた」のだから、サナト.リウムで体操を欠くこともないだろう。しかし、ゲオルクの行動は受動的でありながらも、結果的に自らの願望を全て汲み取っていることを忘れてはならない。資本主義社会に毒された仕事よりも文学という使命の道を、病の徴候に怯えながらも少しでも健康たらんとする道を、それぞれ選んでいるのである。父親がゲオルクに下した死刑判決は、単に何かしらの罪を犯したことに対する極刑であるとは私には思えないし、長く望んでいた文学の道へと漕ぎ出す契機を表しているという解釈だけでも不十分な気がしてならない。この作品はゲオルクと父親、このたった二人の登場人物に、友人とフリーダという二者を話題に上らせて書き上げた、初期資本主義社会に対する痛烈な風刺ではないだろうか。仕事に成功すればするほどより深く社会の歯車に組み込まれ、自らの身体の管理さえも社会に委ねる結果となる。都市化と工業化の進む大都市においては、衛生学的、そして社会学的な理由からも結核という病が蔓延する。しかし病になることは許されず、もし病に罹患すれば社会から隔離されてしまう。そのような非人間的な状況の中で下されたこの判決は、当時の死刑としては一般的だったギロチン刑でも、絞首刑でも、射殺刑でもなく、極めて特異な溺死による死刑であった。判決を聞くや否や「水（川）へと駆り立てられた」[47] というゲオルクの行動は、まるで自然へと帰るきっかけを与えられるのを待っていたかのようにも見える。したがってこの判決は、迫りくる結核の恐怖からも、資本主義社会にはびこる非人道的な社会からも、ゲオルクを避難させて生

47) Kafka, Franz: Ein Landarzt und andere Drucke zu Lebzeiten. S.52

き存えさせるべく、父親の口を通してカフカが言わしめたものではないだろうか。すなわち、カフカにとってこの死刑判決を下すことは、精神的そして肉体的な意味において「生きる」ことそのものであったのだ。さらに、『判決』の異常な結末について、カフカはブロートに「僕はあのとき激しい射精のことを考えていたのさ」[48] と伝えているのだが、「射精」とはまさにエロス、生への願望ではないか。そうだとすると、父親が息子に下したこの判決が、ゲオルクの希望の道標であるという可能性が、現実味を帯びてくるのである。

（慶應義塾大学非常勤講師）

48) Max Brod: Über Franz Kafka. Fischer Bücherei KG. Frankfurt am Main und Hamburg. 1966. S.114

Zur Beziehung zwischen Kapitalismus und Tuberkulose in „Das Urteil“ von Franz Kafka

TERADA, Yusuke

Mein Aufsatz beschäftigt sich mit dem zweifelhaftesten Punkt in Franz Kafkas Erzählung „Das Urteil“: Warum spricht der Vater Georg das Todesurteil aus? Und warum akzeptiert dieser es sogar? Anhaltspunkte bieten eine Menge von Darstellungen an, die an die geheimnisvolle Krankheit der Tuberkulose erinnern, ferner zwei Symbole, „die Uhr“ sowie „das Bett“, die sich beide auf Macht und Autorität beziehen lassen.

Georgs Freund im fernen Russland mit der gelben Hautfarbe ist sozusagen das Alter ego sowohl von Georg als auch von Kafka selbst. Sein krankhaftes Aussehen deutet Kafkas Angst an, dass er in Zukunft an Tuberkulose sterben könnte. Einerseits betrachtete man um 1900 eine bestimmte Schwäche oder Erhitzung des Willens, die einen ungeregelten Energieverbrauch anzeigen, als Symptome der Tuberkulose. Diese Vorstellung der Tuberkulose hat andererseits Susan Sontag mit der kapitalistischen Gesellschaft in Verbindung gebracht. Nach ihrer Ansicht führt auch kein gesundes gesellschaftliches Leben, wer seine Wirtschaftskraft nur ungeregelt verbrauchen oder seine Begierden nicht beherrschen kann, weil er die eigenen Grenzen nicht kennt. Außerdem kann die nicht nur in „Das Urteil“ sondern auch in „Der Verschollene“ und in anderen Werken beschriebene Uhr bei Kafka die Macht des Besitzers symbolisieren. Obwohl der diese Uhr tragende Georg das Geschäft des Vaters schon übernommen hat, was ihm gesicherten Gewinn bringt, und sich sogar mit einem Mädchen aus wohlhabender Familie verlobt hat, hat er subjektiv keinen Ausblick auf eine große Zukunft. Vielleicht fürchtet er, früher oder später seine

Wirtschaftskraft unangemessen zu verbrauchen und dann mehr Lebenskraft als geboten zu verbrennen, weil er sich zwangsläufig als Kapitalist wirtschaftlichen Aktivitäten zu widmen hat. Es ist also in diesem Werk ein Zusammenhang lesbar, der die Ähnlichkeit zwischen der Angst vor der Tuberkulose und den Übeln der kapitalistischen Gesellschaft betrifft.

Wenn man außerdem den Blick auf die Arbeit in einer solchen Gesellschaft wirft, dann lässt sich leicht begreifen, dass der Arbeiter dem Arbeitgeber nichts weiter als ein Rad in seinem Unternehmen ist. Dieser wünscht sich jenen immer gesund, um sich selbst dessen dauernde Arbeitskraft zu sichern; dafür wurde schließlich die Sozialversicherung institutionalisiert. Der Arbeiter hat infolgedessen eigentlich das Recht verloren, krank zu werden und sich behandeln zu lassen. Stattdessen ist ihm die moralische Pflicht auferlegt worden, stets gesund zu bleiben. Der Vater in „Das Urteil", der sich aus dem Geschäft zurückgezogen hat, kann sich seinerseits mit Recht behandeln lassen. Andererseits aber muss der arbeitstüchtige Georg, der unter dem Zwang der modernen Industriegesellschaft lebt, seine Pflicht tun und aus Gründen der Arbeitsmoral die eigene Arbeitskraft kontinuierlich zur Verfügung stellen. Ihm ist schon selbst das Menschenrecht, krank zu werden, weggenommen worden. Gerade die kapitalistische Arbeitsgesellschaft, die das Menschenrecht des Krankseins moralisch verweigert, erscheint bei Kafka aber als geheimnisvolle Krankheit selbst, nämlich in bestimmter Ähnlichkeit zur Tuberkulose. Um sich gegen diese Krankheit zu verteidigen, hat ein Mensch keine andere Wahl, als zur kapitalistischen Gesellschaft Distanz zu halten. Georg, der sich einer einfachen und primitiven Welt zuwenden will, geht an diesem frühlingshaften Sonntagmorgen dann aus seinem vom Licht durchfluteten Zimmer in das dunkle Zimmer des Vaters hinüber, das an das Zimmer eines Tuberkulosekranken erinnert.

Trotzdem belebt sich zusehends der Vater mit aller Macht in seinem Bett. Das Zimmer des Vaters verwandelt sich Georg zum Ort des Schreckens. Ihm bleibt nur, aus dem düsteren Zimmer wegzulaufen, sich von der Großstadt zu entfernen, sich der Bewegung zur Verbesserung der Lebensformen anzuschließen und in die Natur zurückzukehren. Kafka selbst ist in ein Sanatorium gegangen, in

dem Naturheilkunde praktiziert wurde. Dort wollte er sich reinigen, umgeben von „Sonne, Luft, Land und vegetarischem Essen“. Kafkas Georg tendiert eher zur Literatur als zu einem von der kapitalistischen Gesellschaft vergifteten Beruf. Diese Wahl bedeutete im körperlichen wie im geistigen Sinne das Leben selbst. Denn Kafka hat über das ungewöhnliche Ende der Erzählung mitgeteilt, dass er dabei „an eine starke Ejakulation gedacht“ habe, die ja den Eros, das heißt den Wunsch nach dem Leben, andeutet. Mit anderen Worten gesagt, man könnte vielleicht das Urteil des Vaters am Ende als paradoxen wie hoffnungsvollen Wegweiser für Georg entziffern.